The Adventures of SONIC the Hedgehog

大人気！ ゲーム読み物

ソニックの大冒険

作／寺田憲史　絵／おちよしひこ　

美しい湖に面した小さな町、ヘッジホッグ・タウン――。

この静かな町には、あるひとつの伝説がありました。

それは、平和に暮らす人びとに危機がおとずれた時、どこからか青くかがやく光のカタマリが飛んできて、きっときっと人びとを救ってくれる、というものです。

これまでにも、何人もの人びとがその青い光に救われています。

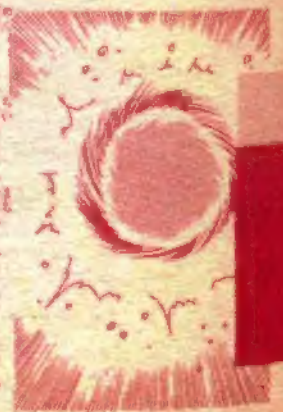
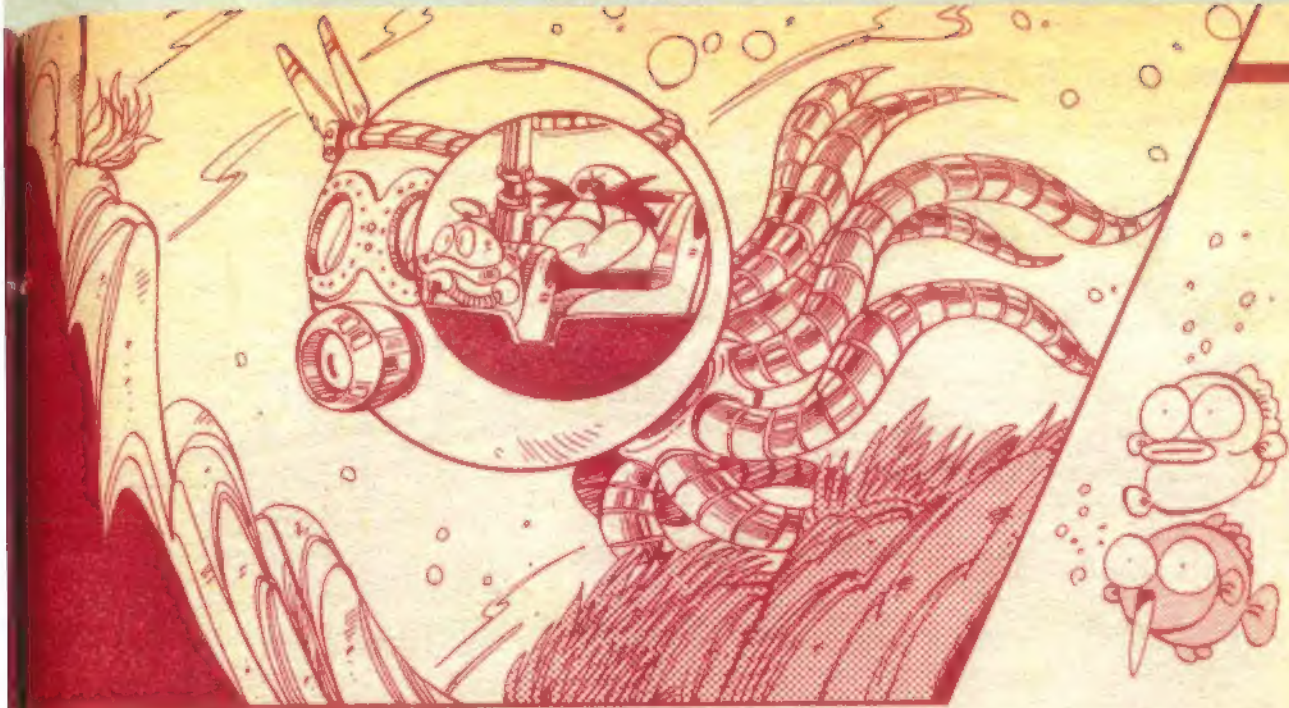
でも、その人たちは、

「いまの青い光は、いったいなんだったんだろう？」

と、きまって言うのです。

そう。青い光の動きがあまりに速いため、助けてもらった人たちでさえ、その光の正体が分からなかったのです。

さてさて、いったいその青い光の正体とは。

いったい。――なんだったんでしょう？

〈超光速エネルギー〉を探しだせ！

ヘッジホッグ湖は、水がとてもきれいなことで有名です。

ここには、ブラック・バスという名前の淡水魚、そのほかたくさんの魚たちや水鳥たちが住んでいます。

でも、今。

ブランブラン・・・。

おかしな音を立てて、おかしなおかしなカッコウの巨大なタコが泳いでいきます。

タコ?

いえいえ、実はそれ、ナゾの天才（？）科学者・ドクター・エッグマンの潜水かんだったのです。

エッグマンは、この湖の底にある秘密の研究室に住んでいます。

そして、ヘッジホッグ・タウンにつたわる「青い光の伝説」をひそかに研究していたのです。

「ドクター、ほんとに、〈超光速エネルギー〉なんか、あるんだなや?」

潜水かんのそうじゅうをしているロボット、オムレッツが言いました。

「ぬふふ、この今世紀最強の天才科学者ドクター・エッグマンの計算に狂いはないわ。見るがよい、オムレッツ！〈エネルギー見つけたメカ〉が、さっきからグワングワンとうなっておるわさ。」

たしかにエッグマンが手にしているタマゴ形のメカが、ブルブルと震えだしています。

とてつもないエネルギーが、ぐんぐん近づいているしょうこです。

「これぞ、長年このワシが探し求めてきたソニック・パワーじゃ。」

「ソ、ソニック、……パ・ア～だなや?」

ドコォ～！

エッグマンが、すかさずオムレッツのオシリをどつきました。

「このバァ～タレが！ パア～じゃなくてパワーじゃい！ あの伝説の小僧、ソニック・ザ・ヘッジホッグがもつというエネルギーのことだわい。」

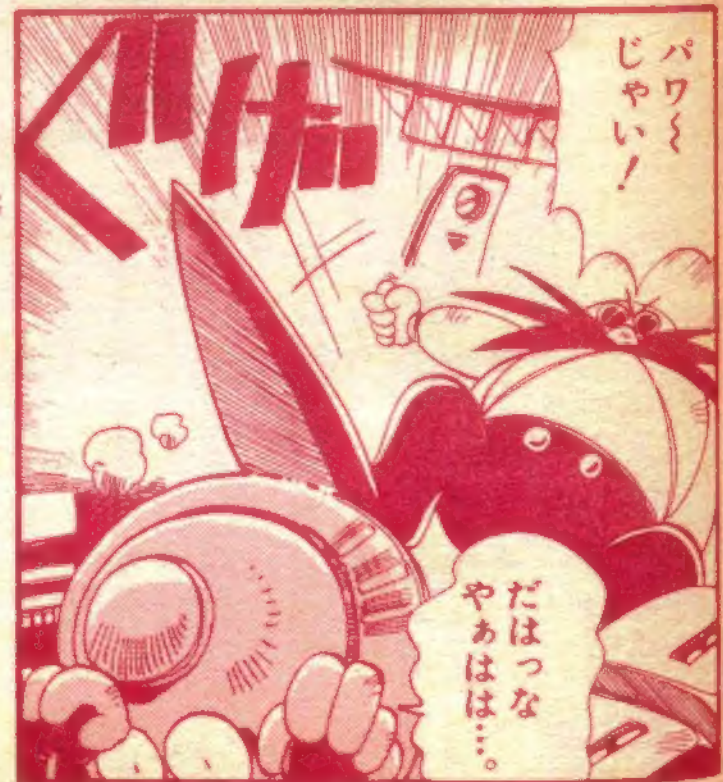
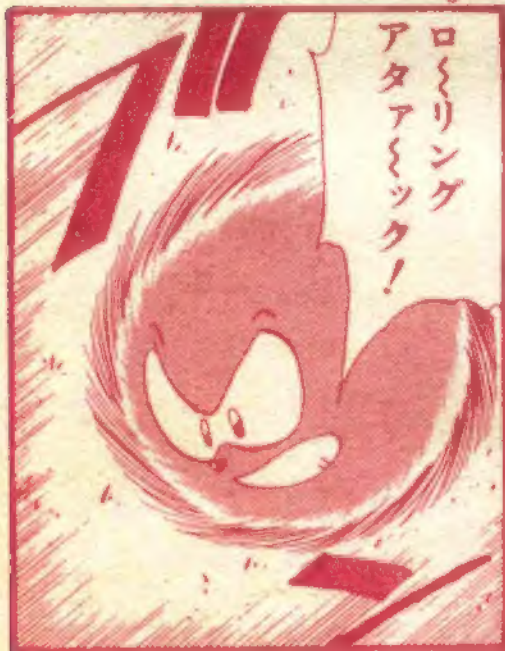
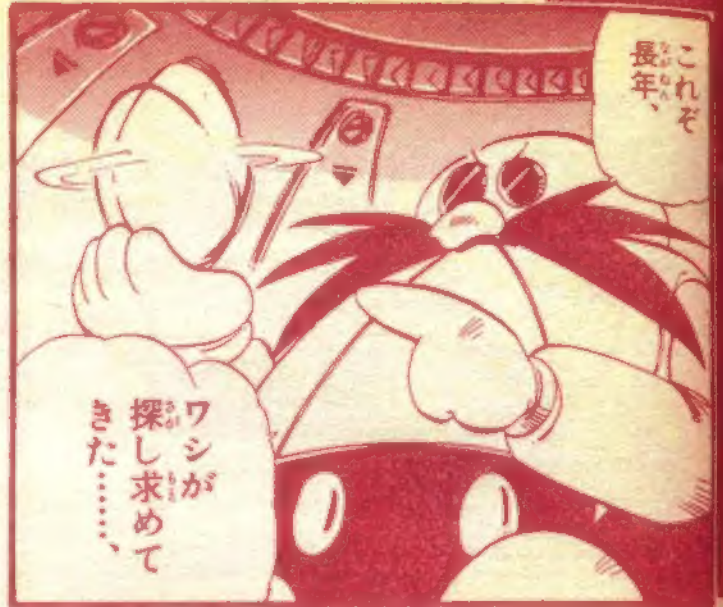
「だはっなやぁはは……。」

オムレッツが、おかしな笑いでごまかしました。

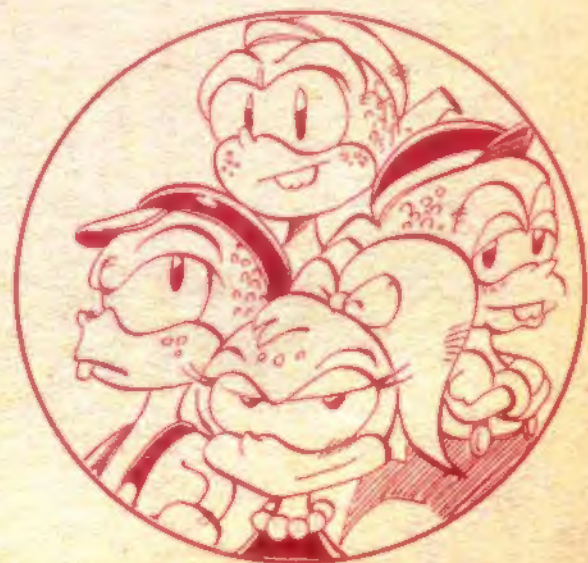
ソニック・ザ・ヘッジホッグ。オムレッツは、この名前を一日のうち何度、ドクターから聞かされるかしれません。

ドクターは、寝ても覚めても『ソニックソ

ニック！」。なんと、テレビゲームやってても「ああ、ソニック！」と言いだすしまつです。
で、そのソニック。
ギンギンにつっぱった青いハリネズミで、やたら強いの速いの、ナマイキなので、
「ロ～リング・アタア～ック！」
と叫んでは、敵をやっつけてしまいます。
ドクターは、この町を何度か救った青い光のカタマリというのも、おそらくソニック・ザ・ヘッジホッグ、カレのパワ～がサクレツしたからにちがいない！　そう思って研究を

パワ～じゃい！
だはっなやぁはは…。

続けてきていたのです。
そして、カレの分析によれば、ソニックのパワ～のヒミツは、光速を超えるエネルギー。そして、それさえ手に入れることができれば、世界中を支配できると読んでいました。
「よ～し、今こそ、あの小僧をとっつかまえてやる！　それ、オムレッツ、浮上せい！」
「だなやぁ～！」
カコン！
オムレッツがそうじゅうかんをたおすと、潜水かんはぐんぐん上昇していきました。

グランプリ●長野県／犬飼 翼くん「オレのシュートをくらってみろ。どうだ、きれ味は!?」

ブ～ンブ～ン／
さて、その湖の水面では、今ちょうど一機の水上飛行機が飛び立っていくところでした。
そうじゅうしているのは、ハリネズミの少年ニッキのお父さん、ポーリー。いろいろな町や国に、荷物を運んだり、運んできたりするのが仕事です。
「いってらっしゃぁ～い！」
ニッキが、妹のタニアといっしょに手を振ります。
ニッキの家は、ヘッジホッグ湖に面しており、中庭からは、モーター・ボートや水上飛行機をとめておくデッキがせり出ています。
ニッキとタニアは、毎朝、そこでお父さんを見送ることにしているのです。
「お兄ちゃん。パパにあんなこと約束しちゃって、ホントにだいじょうぶなの？」
ポーリーの飛行機が、雲の向こうにかくれてしまうと、タニアが言いました。
「ええ？」
「ほら、ベルーカ兄弟とバスケットで勝負するっていう話！」
「あ、ああ……。」
ニッキは、すぐに冷や汗タラァ～、っという顔になりました。
実は、こうです。
ニッキの通うヘッジホッグ小学校には、大のつくワルガキ、ベルーカ・ブラザースという四つ子のイボ・トカゲがいます。
休み時間は、いつもところかまわず暴れ回り、ボール遊びをするニッキたちのジャマをします。
ニッキは、どっちかというとおとなしいタイプ。
乱暴なベルーカ兄弟と、ケンカすることなどできません。
でも、それでいて、ジャマされたりおどかされたまま、た～だだまっているっていうのも、ガマンできそうもありません。
しかも！
ベルーカ兄弟は、ニッキの大好きなクラスメート、エミーにもなにかといやがらせをしてきているのです。

グランプリ●福岡県／福田あゆみさん「ホラ、アントン！　オレの作ったおにぎり食べてくれい！」

そこで、ニッキは、今朝、お父さんに相談しました。

ニッキにとって、お父さんは、なんでも知ってる頼りになる存在です。

お父さんは、ニッキにこう言いました。

「よし、それじゃ、バスケットで勝負、っていうのはどうだ？　ケンカでもスポーツでも、しんけんに戦って汗を流し合えば、アンガイ仲良くなれるもんさ。」

ニッキは、「よし、それだ！」という感じで、すぐに賛成しました。

でも。

考えてみれば。

そうカンタンには、いかないように思えます。

なんといっても、相手はフダつきのワル。

しかも、四つ子には、アントンという大きなお兄ちゃんがいて、そいつは、ダウンタウンでも有名なくらい、またまたワルなのでした。

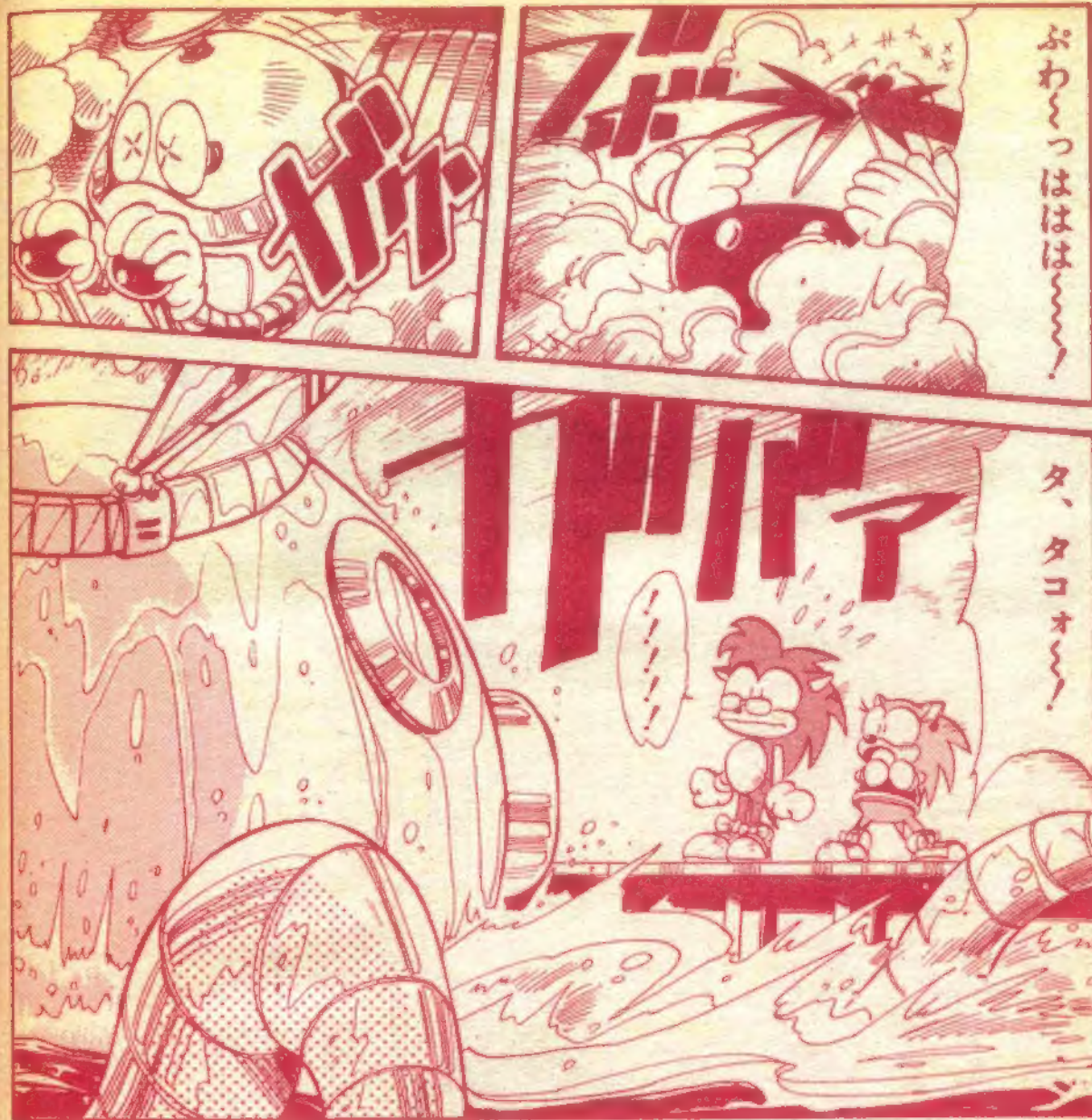
「アントン兄ちゃん、呼んでくっぞ～！　なんて言われたら、ど～すんのよォ！」

「ドキッ……！　タ、タニアァ～！」

ニッキは、ますますタラァ～っとなり、しまいには、フラフラ～っとめまいまでしてきたのでした。

「うふっ！　なぁ～んちゃってね！」

それでいて、タニアは、元気元気！

ニッキをおどかすだけおどかして、タッタ

ッとバスケット・ボールをドリブル。そして、中庭のゴールにポ〜ン／とシュートを決めたのでした。

ズル……。

それを見ていたニッキ、大きなメガネがずっこけてしまいました。

「ドクター。あのメガネの子供が、ソニックだと言うだなや？」

オムレッツが、「ありぃ？」という感じに首をかしげて言いました。

二人の潜水かんは、水面に潜望鏡をのぞかせて、さっきからニッキたちの様子をうかがっていたのです。

「ぶっぷぷ・・・。このワシの計算にまちがいないと言ったじゃろが。見ろ、〈エネルギー見っけたメカ〉がピョンピョン反応しとる／」

「くっふふ〜〜、ぷわ〜っははは〜〜〜／」

ドクターは、うれしさのあまり笑いだしました。

すると、ぶぷぷぷ〜〜〜／　それと同時にオナラを連発。

このドクター・エッグマン、笑うとなぜかオナラも出ちゃう、というのがクセだったのです。

「うわ〜〜〜／　こら、たまらんだりあ〜？」

グランプリ●大阪府／北井慎也くん「オレからのプレゼントだぁ!!　かえしはメガドライブだぞ〜／」

せまい潜水かんの中で、オナラをされたとなればたまりません。

オムレッツは、あわててそうじゅうかんをたおすと、潜水かんを浮上させました。

「きゃあ〜〜〜！お、お兄ちゃん！タ、タコオ〜！」

タニアが、ビックリして悲鳴をあげました。

でも！

その時すでに、ニッキは、とつじょ出現した大ダコに「！！！！」

言葉を失うほど、おどろいて、そしてなんと、情けないことにフラ〜っと気を失ってたおれてしまっていたのでした。

「ドクター、今度ばかりは、計算ちがいだなや。」

ドコォ〜！

ドクターが、オムレッツのオシリをぶったたきます。そして、

「いいや！このワシにミステイクはない！かならず、この小僧の正体をあばいてくれるわ！」

キラーン！と目をかがやかせて言いました。

かわいそうなのは、心やさしく、おとなしい性格のニッキ。

この時だって、マジでおどろいて気を失ったというのに。

これから先、この今世紀最強の科学者ドクター・エッグマンに、ず〜っと追いかけられるはめになるのです。

さて、ベルーカ・ブラザースとのバスケットの試合。

エッグマンは、ニッキの能力を探りだすために、なんと特製のバスケット・ボールをカレにこっそり持たせました。

そのボールのパワーの、すさまじいこと！

バシュ〜！ボールをつかんだニッキは、ものすごいいきおいで、ベルーカ兄弟をはね飛ばしていきました。

「うわ〜っ！いったいどうなってんの〜？」

ニッキは、ヒサンな声をあげて叫びました。

◆特製ボールを手にしたニッキの運命はいかに!?

5月号につづく